



董英堂雜記

二

曾
12
2

15
12
2



1 5
冊 12
卷 2



兼葭堂雜錄卷之二

浪華

前鐘成曉

晴翁撰



○

女産草

蕃名コリスエリゴ此語
安産草とのふりか地名あり

古人の説は此草「エリゴ」の外他所は生

せだ「アエト」や國荒地の紅海の濱砂中より産其大さ手の如く形状ハ

圓く多枝りりて相纏るるくあり狭く小葉りり其中小粒々たる花實の

如さりのりり常は凋る開くをたり然まども彼土の齋日ハ「メルスタ」

とのりり此夜をとりめて開くと「メルスタ」ハ毎年彼が然まとも是古人一偏の

説のこやく誰う是を見らる者なり薬肆及賣薬の徒商賈の爲に瘼

賞しを是を四方に流布せしむ一説は催生の時及ぶ是を酒中小投し

其産期を考るる將に産せんとする時自ら開と温湯の水で陶器彼土の

兼葭堂雜錄卷之二

二納れ此草と能浸せうけいせ一時計と經ついで開く又は是を水より上うへ乾燥かんばつをねの
 えの如く洞ほらむ如是ごとく許あま多くるうとのへどもも燥かわ後のち其その形かたち狀じやう等ひとくまく
 終年しゆうねん曾まじくまじ變かせば催もよ生めのひ期きこれと頭上つうじやう或あるは背せ上のうへ置おき又または掌てのひら中のちゆう持もちある
 後陶器のちゆうぎに水と貯たくわ自みづか投くせしむる須臾しゆんじゆの中其開くと然しかは是安産いんの兆しやうなり
 時ときと移うつれりとも聞きくさらし時ときの難治なんぢと知しべししシユシユテヤ國あしや又また亞細亞州あしやしゆうの女
 催生もよめの期き及およぶま産うむま時ときは是を酒又または水みづに投なげて飲のみせしむる右みぎの
 二著ちやくの所しよと
 詠えいする者ものなり
 一書いっしよ云い蝦夷國えぞのくにの産うむる百合ゆり又また黒くろくろ花はなの物ものなりと又和漢三文圖わかんさんぶんず云い黒百
 合くろひやくがひ。凡たゞ花はな黒くろ色いろ者もの絶た無な之の惟ただ此こゝ紺色こんいろ可愛あま本もと出い出で於お奥州おくしゆう幾いく内うち移うつ種しゆ之の而しか花
 甚た希まれ也土地不相應ちとちあはれ然しか矣なり

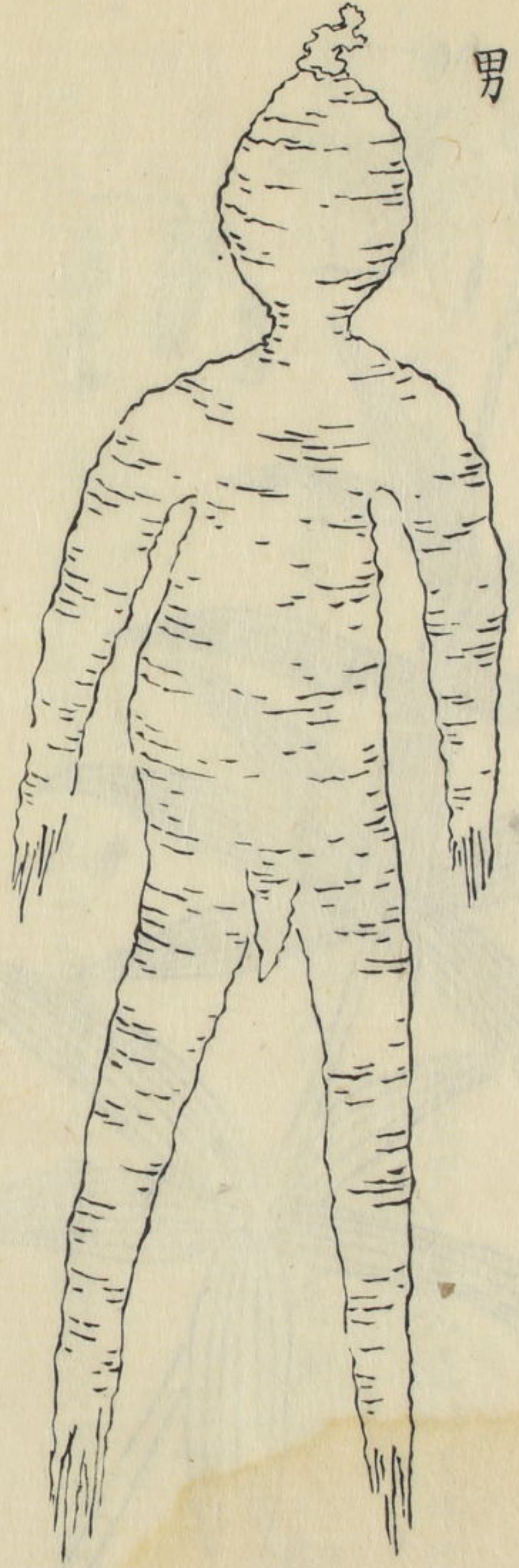


黒百合之圖

一莖七八寸葉三層每層五葉
 莖上分三叉花六瓣

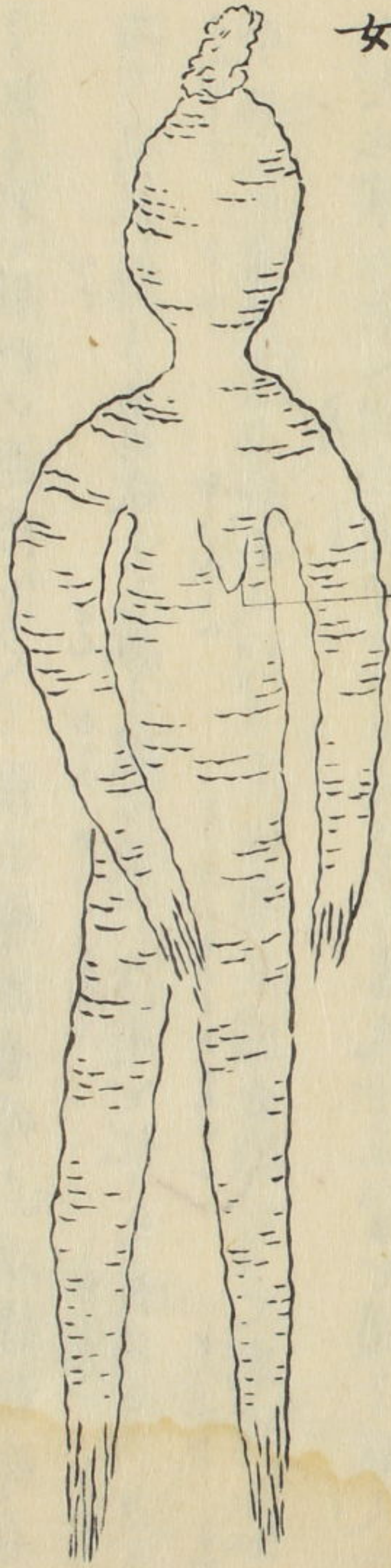
人像人参之圖

延享四年丁卯六月印四番暹羅船持渡る所あり
唐山廣東の産といふ



掛目二拾四匁二分

女



掛目拾四匁九分

片乳アリ

本草綱目人参為藥切要與甘草同功有人參處上有紫氣搖光星
散而為人參實神草也根有手足面目如人者為神云

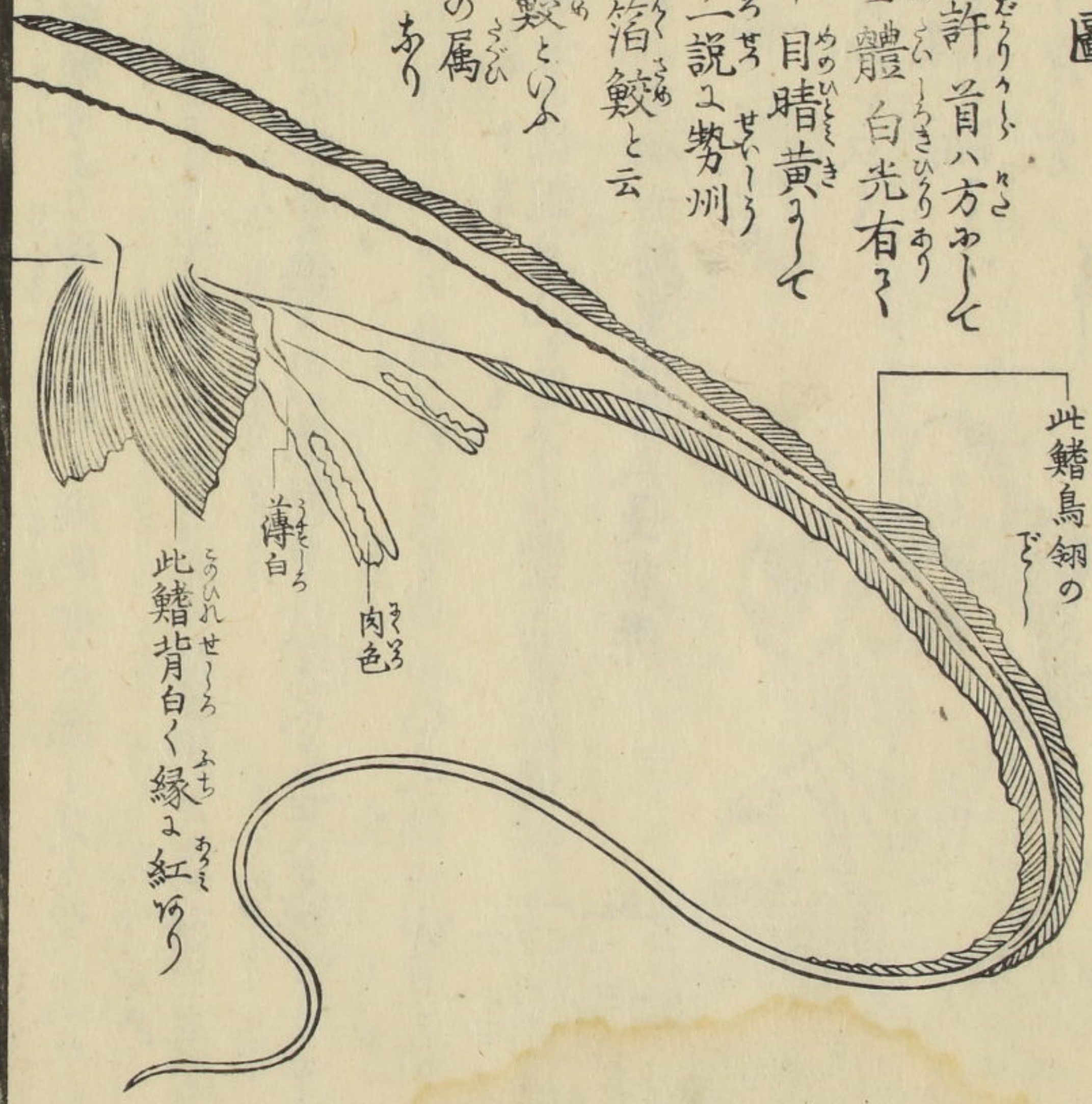
○「カ、リヨア、フセニ」ト云ハ草ノリト按モク「カ、リヨ」ト云ハ藥油ノ通称ナリ
 「ア、フセニ」ト云ハ此草茵陳又似ナリ紅毛國の中「イタリヤ」ト云ハ國ノ河海邊ホ
 多く有リ一王治惡蟲ト殺ス此草ノ油ト二三滴モ殺虫ノ藥湯の中ニ加
 へ服トレバ腹内ノ惡虫トモく消去兼治金瘡臭爛楊梅瘡臭穢
 くて近ツル難クサメノ水ヲ煎ド温め洗ハバ陳疔ト化シ良肉ト成真又古
 今無上ノ奇藥ナリ紅毛人ト云ク往年其國合戦ナリテ戰場ニ刃傷
 ノ人此草の中へ倒れ死セザルケ如クサレドモ凡十五六日ヲ過ク或人行テ
 見ルニ刃傷ノ者疵モ痛クズバテ逐漸ニ平愈シ死人ハ全身腐ラバテ
 完リト云リ此時より紅毛國モカクノ如ク神藥ナリト云ク始知リ
 吾日本國モ亦此草ナリヤ否哉後人ノ考ヘテ俟テ
茵陳ハ艾蒿ノ種類
 ナリテ幾内ノ河原ニ生

○「投、易、河、邊、郡、滿、願、寺、より、坤、八、丁、許、又、西、明、寺、の、瀧、と、云、る、所、り、高、五、丈、八、寸、余、り、
 岩、又、添、く、落、る、瀑、布、ナリ、此、瀧、の、上、の、方、道、路、の、傍、ニ、佛、足、石、の、左、右、行、足、石、り、長、さ、
 壹、尺、三、寸、中、五、寸、凸、凹、の、岩、上、ニ、鑄、る、其、詳、ナリ、バ、ト、云、ク、世、人、足、形、石、ト、言、ウ、ハ、セ、リ、
 此、右、の、足、形、の、石、ハ、谷、を、隔、ク、向、ひ、の、嶺、ニ、在、リ、ト、言、傳、ふ、レ、ド、モ、誰、シ、カ、見、行、者、モ、
 未、ダ、全、ク、好、事、の、者、の、偽、説、ナ、リ、ト、思、フ、小、墜、真、東、征、傳、云、
 劉、山、東、南、嶺、石、上、有、佛、右、跡、東、北、嶺、上、復、有、佛、
 左、跡、世、傳、迦、葉、佛、之、跡、也、ト、云、
 夫、レ、ハ、西、土、の、例、ト、以、テ、
 爰、モ、山、と、隔、ク、
 造、り、置、ク、ナ、リ、ト、
 山、川、正、宣、の、説、話、ナリ、



阿州異魚之圖

長二尺四五寸許首ハ方なり
全體白先有
太刀魚の如く目暗黄
鮫目ハ似たり一説ニ勢州
津の方言ハ鮫と云
紀州ニ天狗鮫といふ
即劍尾沙魚の属あり



此鱈鳥翎の

此鱈背白く縁は紅なり

薄白

肉色

此黒條也
腹白
靱あり

齒白く微青と帯ぶ

鼻頭白く微紅を帯ぶ小孔数点あり
條を貫きける孔ハ條あり孔より大あり

○出羽國秋田領雄勝郡の水邊三四里の間暑中出づりて人を刺り形小なり
 人の眼を見えぬ刺る痕蚕の如くして大熱を發し稀に治するも有
 るくども十と七八すべし三日を過ばくと死すされば年毎に二三人或は
 四五人死ざるといふなり一居民恐るゝ此に至るは自然と怠慢を以て
 其辺の田圃大に荒廢し縣史これと愁ひまづく心と尽さるゝとくども
 治療誰らにぞ知る者なりとぞ

本草綱目は沙虱とくろりありて其形勢よく相似り此條下は凡遇有
 此蟲處以火炙身則出隨火去也云々れども是木の法よく治とくべ
 ゝ見へざるよ一或曰此水邊三四里に限りて此虫を生どる此水上高松村
 の近辺に硫黄山あり其毒水あがり酢川村とく所の川に入其水の味酢

のくくろふよとく酢川と名づく此水大河は落合く毒虫を生どる
 うと言ひ本草はくく酢川の汁を
 用ると験ありとく聞ゆ

竹筍化茯苓

大サ七寸余
色茶は沙黒

栗津家所藏



本草綱目茯苓出大松下附根而
 生云云或云松脂凝成或云假松
 氣而生云云
 然る竹筍化して茯苓とある
 変奇なりとくべし石化して像も
 其の往々見及べし按じると強ち
 茯苓と決するも有べしとく
 石質の柔弱あり
 化してあるべし

○飛驒の國の山中に生くる篠竹の節は春の下旬に降りて篠の節より竹と
 生れ其形恰も魚の如し斯く五月雨の頃自ら落る溪に入化して
 魚となり水中を遊ぶ是を岩魚といひ篠魚といふ大概鱒の二年に一度
 降り如く漁る食する味は又鱒に彷彿するを先年加賀の國人淺水
 又竹の葉の半魚と云りて遊ぶと見ると語りても是の類なるべし
 山暮菴の鰻と化し腐草の螢とあるの類は又あるも竹の風土に
 よくて奇ある夏の有りのみこそ飛驒人何某の先年持来りて寫し
 置ぬむ大小さまざま有るれども此より正しく見ると斯の如く
 彼國に因りて人の豫く見りて聞かすつらん

篠魚の記

篠魚として竹の節物あり有るれ
 荒城郡高原の里に奥なる平湯の
 村に地の山ふのこ有る此飛驒
 國內にも餘所は有る夏に
 聞く聞え竹の節のりて竹の枝
 ありて竹の魚の形と成出り五月
 雨のりて得る谷水に落りて
 りて鱒の形と出ては竹の節と
 り物ありて竹の節のりて竹の枝
 りて鱒の子に二年経るとなりて



篠魚之図

長サ凡九寸
 頭廻り
 凡二寸

喰^くる味^{あじ}も見^みる^るも大^{おほ}く鱒^{ます}子^こをわ^わる^る処^{ところ}き唯^{ただ}い^いろ^ろあやの違^{ちが}ひの^よこ

る^る山河^{さんか}の岩^{いわ}間^まの淵^{ふち}よ^よの^の然^{しか}ば名^なもよ^よ成^なべ^べ竹^{たけ}の根^ねの蟬^{せみ}と^とり山^{やま}の^のい^いも

の鱒^{ます}と成^なて^てふ

た^たぐ^ぐひ



魂^{たま}の^のな^なま^まい^い有^あり^りの^のよ

あ^ある^る例^{れい}と^とり^りね^ねは^は是^この^の空^{そら}言^{こと}と

ら^らふ^ふら^らい^いひ^ひら^らい^いへ^へら^らえ^えら^ら 在^ある^る野^の翁^{おきな}の物^{もの}せ^せら^らる^ると俊^と香^かが^がら^らい^い

岩^{いわ}魚^{いそ}の^のな^なま^まい^い有^あり^りの^のよ

○寛政九年三月十五日備前國兒嶋郡波知村の民長吉弟小次郎と共ふ其村の

後^{のち}なる鴻^{こう}の峯^{のね}と^とる山^{やま}ふ^ふい^いり^り礎^{いし}石^{いし}と^とるふ^ふ餘^{あま}り^り又^{また}大^{おほ}く^くれ^れと^とる^るお^お碎^{くだ}す^すは^はい^い

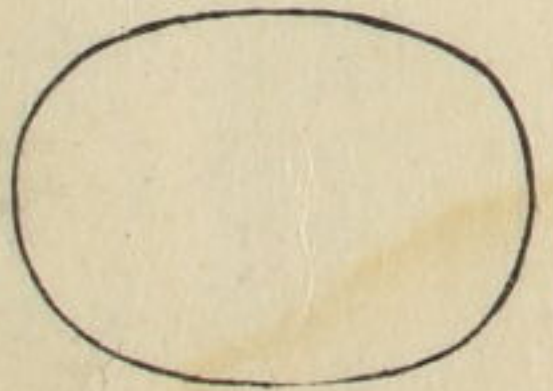
石^{いし}中^{なか}より一^{ひと}顆^{つぶ}の白^{しろ}玉^{たま}の^の大^{おほ}き^き圖^ずの^のど^どり^り同^{どう}年^{ねん}六^む月^{げつ}市^{いち}令^{しやう}湯^{たう}浅^{せん}某^{なつか}より一^{ひと}首^{くび}の哥^{うた}を^を添^そへ^へ

寸^{すん}と^とる^る五^ごの^の大^{おほ}き^き圖^ずの^のど^どり^り同^{どう}年^{ねん}六^む月^{げつ}市^{いち}令^{しやう}湯^{たう}浅^{せん}某^{なつか}より一^{ひと}首^{くび}の哥^{うた}を^を添^そへ^へ

寡^わ君^{きみ}も^も呈^ませ^せと^と作^ある^ると^とよ^よの^のあ^あら^ら玉^{たま}の^の光^{あかり}より^{より}照^あら^られ^れる^る君^{きみ}が^があ^あら^らる^る

本草綱目有山産水産二種石韞玉則
氣如白虹精神見於山川也凡石韞玉
但將石映燈看之內有紅光明如初出
日便知有玉也山有穀者生玉水圓折
者有珠方折者有玉玉之精如美女凡
産玉之處多中國之玉則多在山

白玉之圖

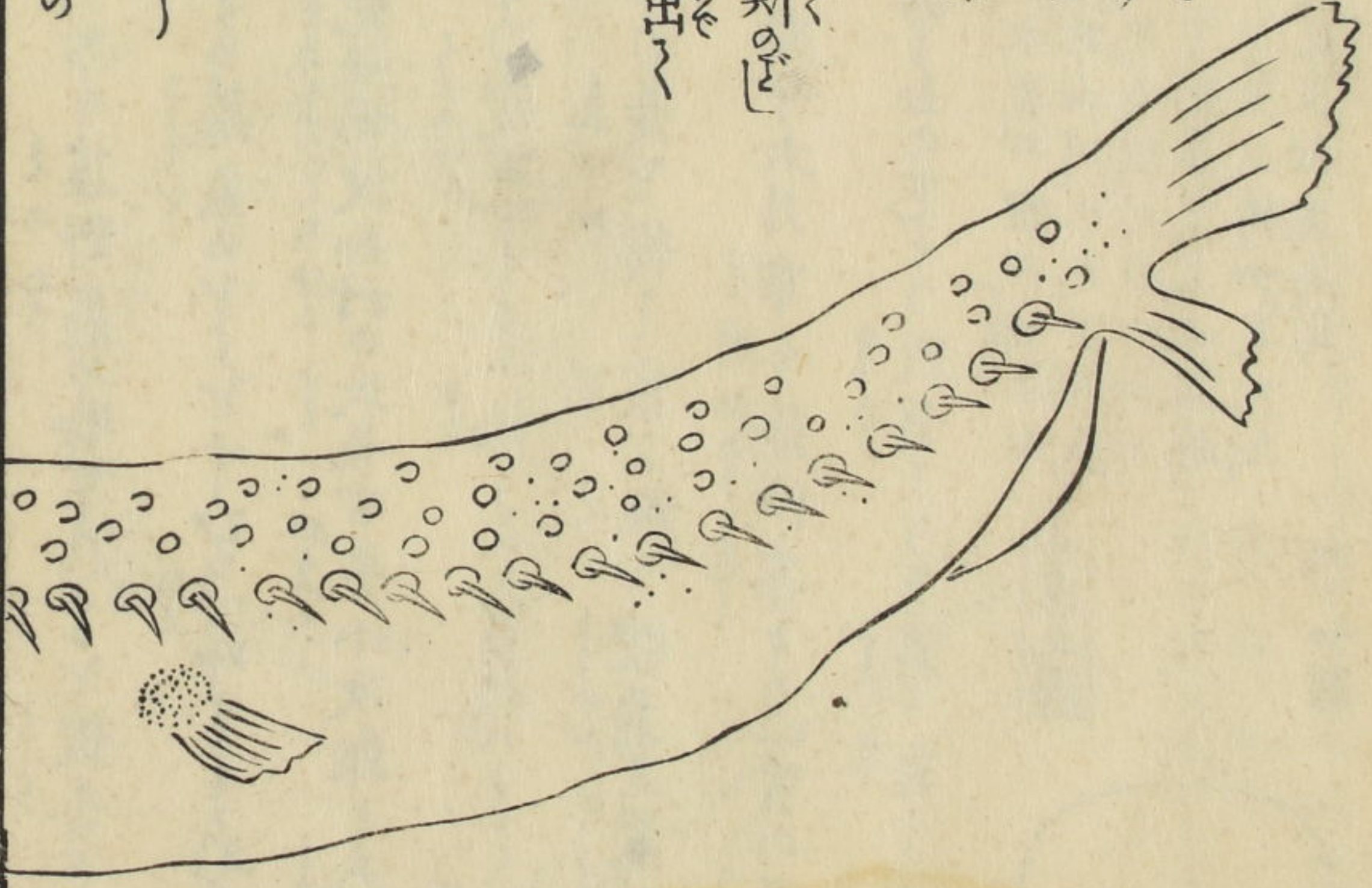


大サ如圖

異魚之圖

天明四年の冬下総國小堀と
布川の間に河岸の鮭
細くかゝる所の異魚を魚名
詳あり

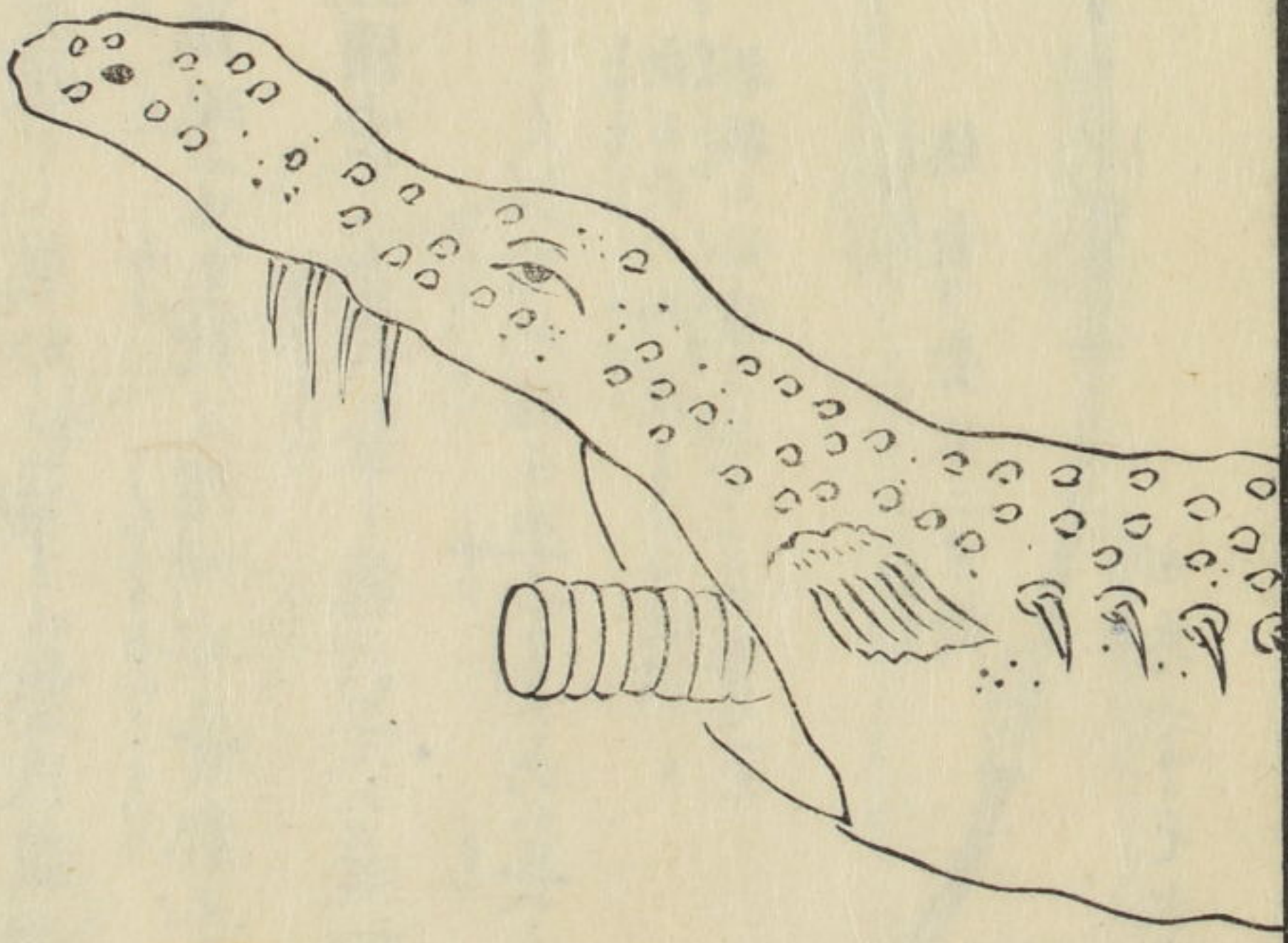
魚の形状五角あり背腹斯の
背黒くそのの星高く出
大粒なり惣長七尺五寸余
周廻り五尺余口提燈の
盈縮あり口は釘の
ありの有長サ五六寸
赤く番椒の腹白
腹の釘の



此二本釘の本

丸座りり恰也
金具は彷彿なり

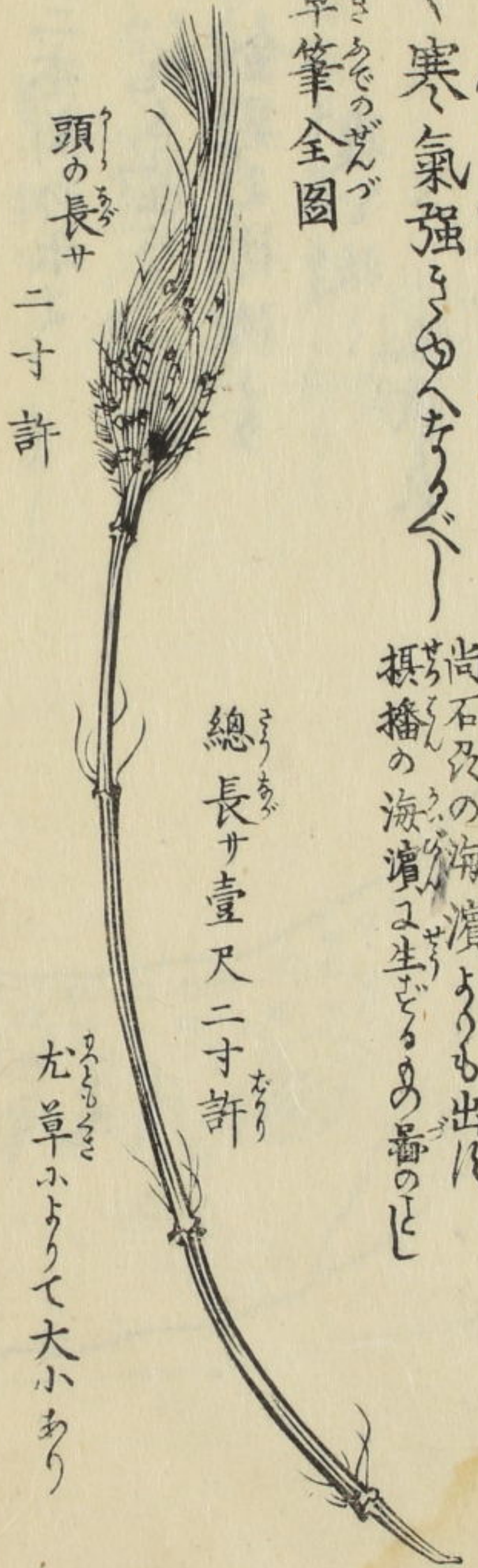
腹を抜
塩漬
凡四斗樽
満りと云



○ 攝播の海辺に生筆草とるあり初春より青葉を生ど其葉細長く
緑又細くはるりの小なる葉の長さ七寸大なる一尺三四寸もりの大概管葉の如

冬に至つて葉枯又春と迎へて葉生年々如此あり根絶る夏は冬に
 頃風烈しく吹く海は濤岸と穿ち磯辺の土砂を吹上ると終至つて
 自ら草の根はつれ出る是を採り乾かして筆又製以筑前國あり
 天生筆といふ伊勢國の海辺にも生れ又信州安曇郡千國村の山中
 にも生れ是は夏の日とて日干は北國より蓮如筆と稱は是は蓮如上人始め
 此草を書せしれ故斯の号くといふ北國は生むるもの長きなり
 全く寒氣強きゆへに
 尚石及の海濱より出ば
 根播の海濱に生むるもの番のじ

草筆全圖

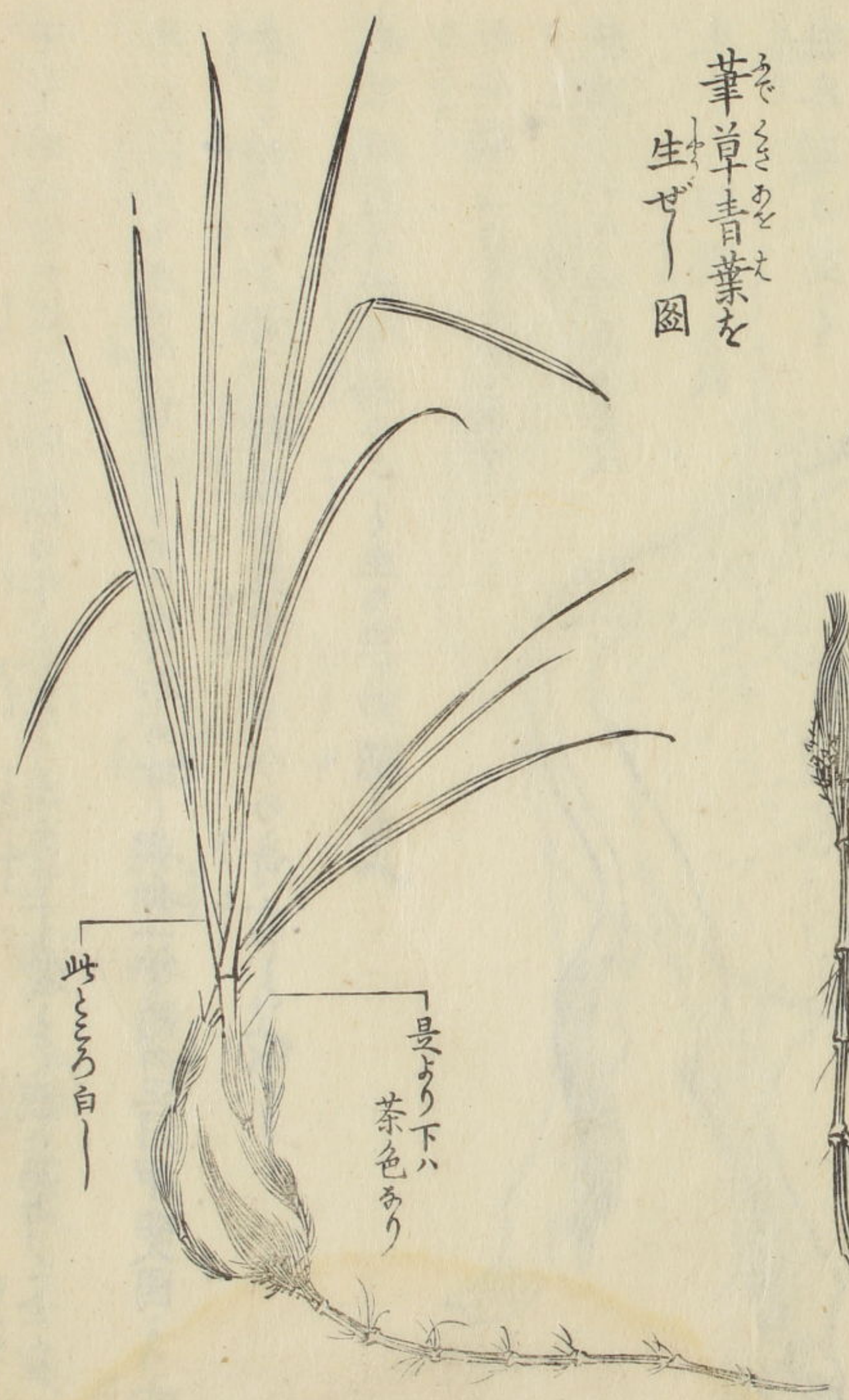


總長サ壹尺二寸許

尤草小よりて大小あり

北國の海辺に生むるもの長さ
 三四寸より二四葉葉の
 旅人家土産におり

草筆青葉を
生ぜし圖



○甲斐國保坂の牧の馬野飼の牛と交る出生せし者とて頭ハ馬カシテ全身ハ

牛の四足も左の尻ハ馬の如く右の尻ハ牛の如く明和二年酉の正月甲斐國より牽

来り浪華ニ於て觀物トシ實ハ古今の奇畜トシテ

本草綱目ハ牡驢馬ハ交る生ものト即騾ト云

牡馬驢ハ交る生ものト

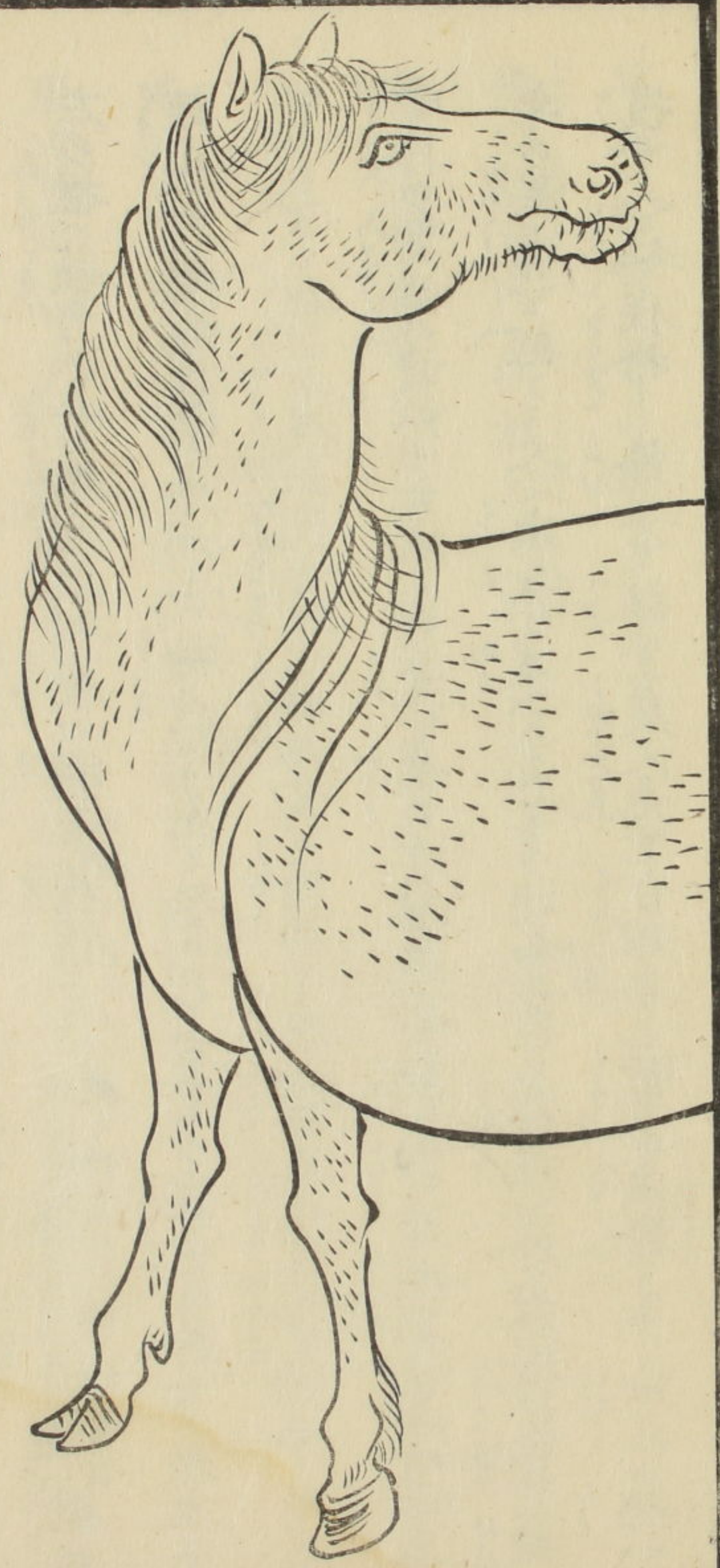
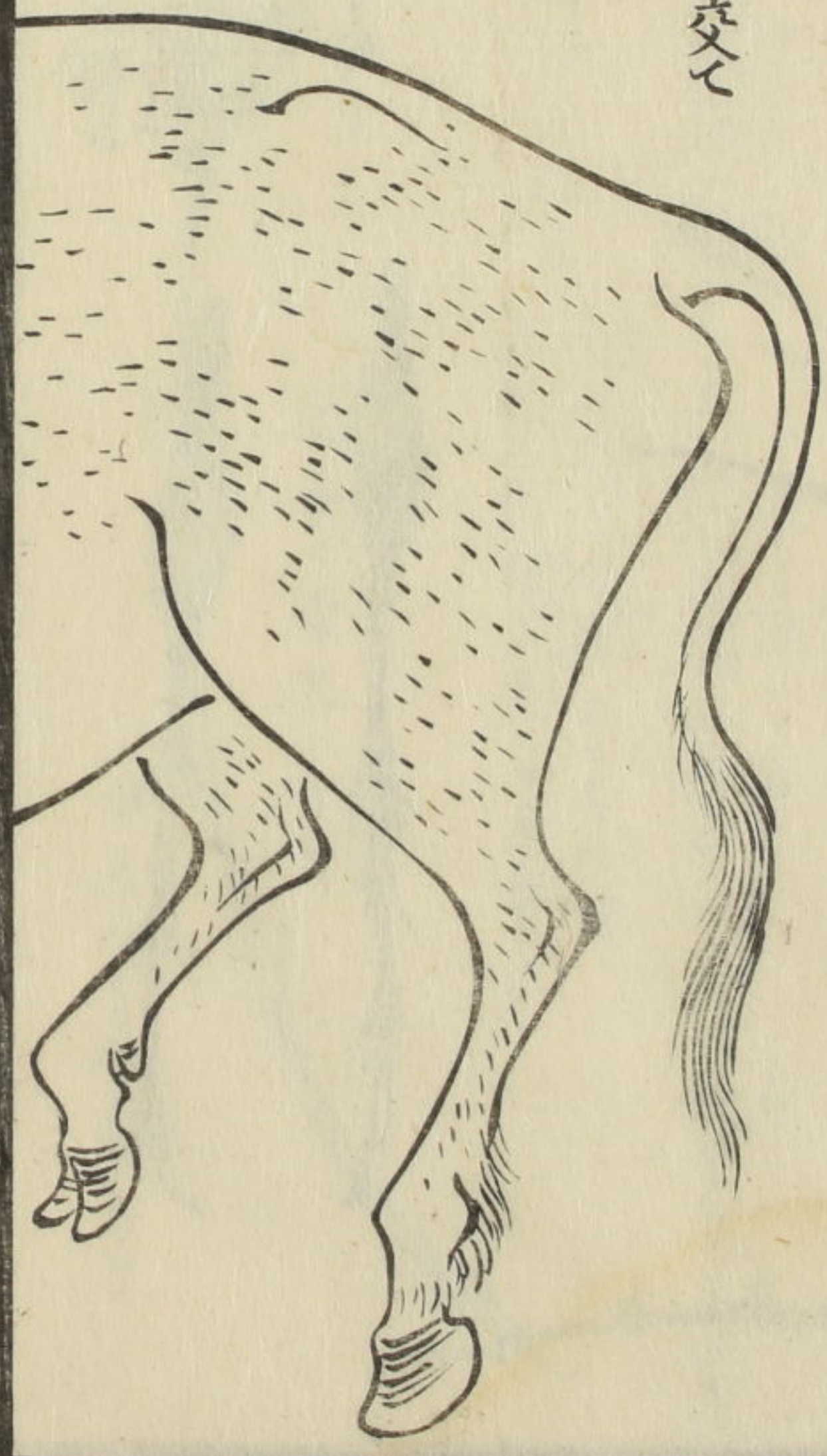
騾トハ牡牛馬ハ交て

生ものト駉驢トハ

牡牛驢ハ交る

生ものト驢騾ト

牡驢牛ハ交る



生ものト駉驢ト云有

然も此馬も駉驢の類なり

實や生りもの氣ト云稟く生るると天性ト云故ハ此馬も

頭ハ又の如く又左の脚の陽ト云又ハ似るこそ自然の道理ト云

○播磨國多可郡富田莊^{とくこく}和多山西仙寺^{たひやせん}とも古刹^{こじつ}なり當初^{たうしつ}白雉年間^{はくぢねん}天竺^{てんぢく}より法道仙^{ほふどうせん}とる法師^{ほふし}よりて建^{けん}立^りせし処^{ところ}なり今本堂^{いまほんだう}と稱^{なづ}ぐるもの八間^{はつま}ふ七間^{しちま}の尺間^{しゃくま}上^{かみ}云^いふよう閑基^{かんき}のまうゆ^{まうゆ}敷^{しき}同^{どう}の兵火^{へいふ}よも免^{めん}ま雷^{らい}の爲^{ため}も損^{そん}ぜぬ今^{いま}存^{ぞん}存^{ぞん}せり此堂^{このだう}の大檀^{のだいだん}の前^{のまへ}は二本^{にほん}の楹^{てい}なり右^{みぎ}の楹^{てい}ハ躑躅^{しつしゆく}と加西郡^{かさいぐん}木谷^{きや}より曳^ひ来^{きた}るところ左^{ひだり}の楹^{てい}ハ萩^{はぎ}なり當郡^{たうぐん}西服村^{せいふくむら}萩^{はぎ}が瀨^せゆて伐^き得^えし故^{ゆゑ}萩^{はぎ}が瀨^せの名^ななり又^{また}柱^{はしら}の經^{けい}凡^{およ}一尺^{いちしゃく}三寸^{さんすん}余^{あま}も有^あは右^{みぎ}此木^{このき}ハ神代^{かみよ}より生^なる処^{ところ}なり右堂^{みぎだう}の經^{けい}管^{くわん}の折^をり用^{もち}木^きとせし程^{ほど}ハ正慶^{せいけい}年間^{ねんかん}赤松^{せきま}則^{すなは}ち此堂^{このだう}と修補^{しゆほ}し屋上^{やじやう}梁^{りやう}柱^{ちゆう}ホと造^{つく}替^かられれども堂内^{だうない}の雙楹^{すわうてい}ハ故^{ゆゑ}り古木^{こき}と是^{こゝ}は故^{ゆゑ}りれりしが既^{すで}ハ白雉^{はくぢ}年間^{ねんかん}より千百^{せんぱく}有余^{あま}年の星霜^{せいそう}と經^へり大^{おほ}破損^は損^{そん}及^{およ}べりよ明和^{めいわ}の比^ひり修理^{しゆり}と加^かふ此^{この}時^{とき}双楹^{すわうてい}の盡^{じん}損^{そん}せし處^{ところ}ハ伐^き捨^{すて}る餘^{あま}木^きと經^へり衆^{しゆ}人^{にん}是^{こゝ}と白雉^{はくぢ}木^きと稱^{なづ}ぐり伐^き除^ぞる古木^{こき}の端^{はた}と



風流^{ふうりゆう}の畧^{りやく}物^{ぶつ}ハ作^{つく}りて數^{かず}りてとせり當任^{たうにん}杜^と多道源^{ただどうげん}の物語^{ものがたり}なり或^{ある}云^いふ萩^{はぎ}ハ榛^{しん}の誤^ごなり胡^こ枝^し花^かの萩^{はぎ}とくハ有^あま^ま覚^{おぼ}也^{なり}と按^おふ和漢^{わくわん}三^{さん}才^{さい}圖^ず會^{かい}有^あ山^{さん}萩^{はぎ}有^あ白^{はく}花^か者^{しや}自^{みづか}紫^し開^{かい}分^{ぶん}者^{しや}北^{きた}國^{こく}山^{さん}中^{ちゆう}有^あ大^{だい}木^{ぼく}可^か爲^ゐ柱^{ちゆう}者^{しや}四^し國^{こく}山^{さん}中^{ちゆう}有^あ南^{なん}天^{てん}燭^{そく}大^{だい}木^{ぼく}俱^お幾^お内^{ない}人^{にん}不^ふ信^{しん}山^{さん}萩^{はぎ}又名^{またな}葉^え大^{だい}團^{だん}有^あ大^{だい}木^{ぼく}強^{かう}て榛^{しん}と稱^{なづ}ぐるも言^いふかろべし居^い川^{がわ}某^{なつか}ハ風流^{ふうりゆう}と好^{この}むと歌^{うた}誹^ひ諧^{かい}と善^よす庭^{てい}前^{ぜん}の草^{くさ}木^{ぼく}も其^{その}名^な所^{しよ}より取^とりて名^なをせしめて所謂^{しゆゐん}井^い出^での山^{さん}吹^ふ野^の路^ぢの萩^{はぎ}在^あ原^{はら}の薄^{うす}なりゆりゆり名^な所^{しよ}の草^{くさ}木^{ぼく}と集^あめて樂^{たの}む一時^{いちじ}家^か僕^{ぼく}ハ叁^{さん}河^かの國^{こく}の産^うる者^{しや}と遣^つひりて此^{この}男^{おとこ}のう^う難^{がた}き用^{もち}りて暫^{しば}く暇^まとこひて故^{ゆゑ}郷^{きやう}ハ飯^いらん^{らん}支^しと願^{ねが}ふ主人^{しゆじん}これと免^{めん}く飯^いらん^{らん}は幸^{さい}の便^{べん}なり彼^か八^{はち}橋^{はし}の古^こ蹟^{せき}ハ生^なる雙^{すわう}子^し花^かと一^{いつ}本^{ほん}携^{たづ}へ飯^いらん^{らん}呉^{くれ}よと詭^あゆふ僕^{ぼく}もいと安^{やす}きことと兼^あ引^ひつ急^{いそ}ぎ故^{ゆゑ}郷^{きやう}ハかへて彼^か此^{こゝ}と

用と調へ終は飯路よりいへ彼燕子花を求め得る主人の家土産ふとて
 大切と持ちてうらぐ途中の渡船あり此水とていへ過る水中に
 鹽ぬられしと言間もあつて遠く流るるも爲方ありて數あるを
 痛めまがく空しく浪花は飯まつ主人の如きとて語りて只管よびる
 が主人大に感嘆し我年来りてふ無益ものこのよ耽るよあり天必
 禁めりふまらるべし何ぞ是を咎めんやとて先非と侮りし其との
 狂詠よちよも餘りぬれぬわづらひて河のつとふもぬも花をり
 此更やんごとあれ御方の聞しや及せしれ甚面白とて其頃和歌の御會
 ありりる御題よ不見花と遊ばれしとて
 ○日本ゆく輕粉と焼くゆめへ京都住原屋某との人きり故は輕粉と俗よ

らと号せり室町時代以後の更なりとぞ

本草綱目水銀出於辰砂者取之法用瓷瓶盛辰砂不拘多少以紙封口香湯
 煮一伏時取入水次鼎内炭塞口鐵盤蓋定鑿地一孔放盆一合盛水連
 盤覆鼎於盆上鹽泥固縫周圍加火煨之待冷取出則汞自流入盆

矣云

○一説は草より汞と取法あり又拂林國の水銀は海中ふ有とて本邦往昔ハ山中より
 掘出せし物と見え和銅六年伊勢國より水銀と献ると續日本記に見え又延喜式
 は伊勢國の貢の藥中水銀あり又百練抄は兼曆元年五月宋國へ賜水銀五千兩
 と有然に當時水銀と採得ると盛大なると證あり又草根集題名所抄
 根と然るべきぬも本もあれぬとていへる丹生のもや山

又七十一番職人盡歌合の中水銀掘あり其圖中亦携る所の竹筒の如き品有り
恐らくは之を以て岩間より走下ると受るものありべし

七十二番職人盡歌合水銀鑿之圖

右 五十六番

水くひかり

足がくひの乃るまをきくり

みめりきまつけり

やされる

月此ひらと

わらさるるめりの

みふよはふ

うねの乃るくくあり

おひつるめり



今市店又活ところの水銀朱砂の製りて生汞の産りてを聞け

○清李勇卿名爲著於普救堂藥方三卷有り其中計粒匙とる匙の

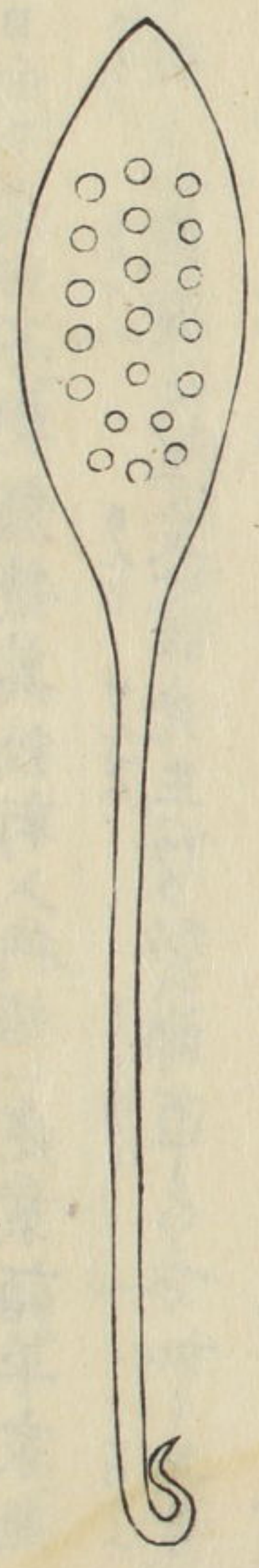
圖有り匙の舌の所又二十箇の凹有り一匙とる九葉をむとて則此粒

有りいろさぬ巧るるもの有り此い甚だ珍書あり日本俗用療治調宝記

の類の書を有り就中此匙とる珍奇とるべし

計粒匙吾家始製之抄九粒一匙而微揺則餘物皆趨去

任凹穴者不計而二十箇云々



○盲人を檢校とる官名ハ本よりあらば莫き檢校句當ちと稱するやうふ成

づらひ世下りての美しく甚謂るは夏より借上とつべし二水記云永正十
 四年五月七日向千庵田亭朝飯後萬松軒入御福一建業語平家無双之
 音吉也云々按る小建業といふ文字は先生よりひ師匠とつづ如く其業の成就
 したるの家言あり何の項より借と檢校と書しふやと考ふる小康富記
 文安元年四月六日の條は珍一檢校とあり然きども室町殿の頃より盲人
 と愛せしれ明石建業覺一等出頭と古記に見へるれば室町家より
 盲人も出頭のとつて遂に室町家の中葉より檢校と書ふといふ成りたる
 べし次々勾當あどの林も起りたるあしん一字とつくるまゝ俗家小
 通字と名つくる如く上々あては室町代々義の字を用ひられし同し城の字と
 通字おつけし八坂方といふ今唯一の字とのと衆人思へり又段々の階級

づらひ市都の次第は是は盲人は二とつたる夏は定例と心得しよりの義ちり
 一と音小呼へはと市都の二字の訓讀より刺岩市秀都を訓のにて舞
 妓哥妓のどれの名と一般あはるぬ笑ふべし一と僧名のごく音あて称とべき
 夏彼家の本義を盲人は五流より聞き一方三流志道流戸島流城方二流
 大山流城方と書くやさう方と称呼するところ城一建業の末流城元八坂
 妙文流郷は住し末の輩も城の字と通字おせし故に斯は稱し今も間々城の字
 と付る盲人は是市都の例といはれり

生佛坊

建久年中始謠平家

如一建業



城一建業

城元

任洛東八坂鄉謂此流
稱八坂方

城意

城存

檢校けんぎょうとふ夏なつの推古紀おしほのき云自今以後任僧正僧都應檢校僧尼しんげんとられせうぜん僧分の官くわん之
 僧正僧都しんげんとる人ひと普ひく僧尼しんげんの進退しんたいと司つかさどる趣おもむきられせんげん兼官けんくわんとふべせう禁秘抄きんひせう云
 掌侍六人正四人しやうじ推二人おし推自上古有之此内おし以内侍いなるし爲な勾當かうたう云云職原大しやくげん全云
 内侍則指掌侍也此四人内第一曰勾當内侍今長橋局是いなるし是ありと有と見あ下
 勾當かうたうの盲人めうじんも檢校けんぎょうみみひひくく衣ころもと著きるち由縁ゆゑん不審ふしんなり
 ○藤原宇方ふじわらのうまさ云和銅わどうの和わ熟じゆく和わの義ぎあり都みやこに金銀銅鉄きんぎんどうてつの土中つちのちゆうの石いし混まじまじま或あるは
 沙中さちゆう小交せうかうとると鍛冶かじ鞆たもと吹ふきき作りつありそ其そのりりのの得えるるとるると作つり
 成なるるとるるとと秩ち又またののああるる土中つちのちゆう今いまもも得えるるとるること自みづか

然銅ぜんどうとるるとちち其自然銅しぜんどうと得えるる秩又郡ちとと献けんりりとるると其時そのときの
 詔みことづかひも東方武藏國たうほうぶさうこく自然しぜん作成さくせい和銅わどう出在しゅざい止と奏そう而献けん焉んとと和銅わどうの和わ皇朝すうてう惣そう
 との名なとありありひひくく此時このときととめて皇朝すうてうとと銅どうと出でせせととありありひひくく誤あやまりり和わの字じ
 と皇朝すうてうの名な又書かききるるひひくく後世のちのよの俗よありありととありありととありあり和銅六年わどうろくにん詔みことづかひと國郡村
 里さとの名なとありありくく二字ふたごじ又改あらため佳字よきごじ又去いるるとと此時このときととて文字もじと改あらためめ秩夫しやくふとと
 後又改あらためめも見みゆれゆと倭やまとと大和おほなごと改あらためめととも此時このときと見みゆれゆと和わと書かき
 せせと曾そうととありありととやままと一國いつこくの名なありありととありありととありあり國初くにのまはより世々よ皇居すうきよととあり
 ばばありあり皇朝すうてうの惣名そうなともともありありとと文字もじの倭やまと又日本よめいと書かききととやままと稱なづけけり
 和わの字じと書かききととやままと稱なづけけり皇朝すうてうの惣名そうなととせせと和銅六年わどうろくにんの後の書のちのふふととやまま
 ままと夫おつとより前皇朝ぜんすうてうの惣名そうなと和わの字じと用もちひひとるる古書こしよののありありとと顯然けんぜん且金銀きんぎん

と皇朝ありて出せしはとて後の夏と見われと鍊銅の神世も出ると見

由古夏記云取天金山之鍊今案鍊借訓也曰夏記而求銀冶天津麻羅而科伊斯

許理度賣命令作鏡神代記云以石凝燒為冶工採天香山之金今案金以作日

矛と鍊銅のくばちふとてく矛鏡と作ると且古言は鍊をまがむとつくるまはま

真木まこのまと同く美称あり木の中第一ののちねは檜をま木とつひ

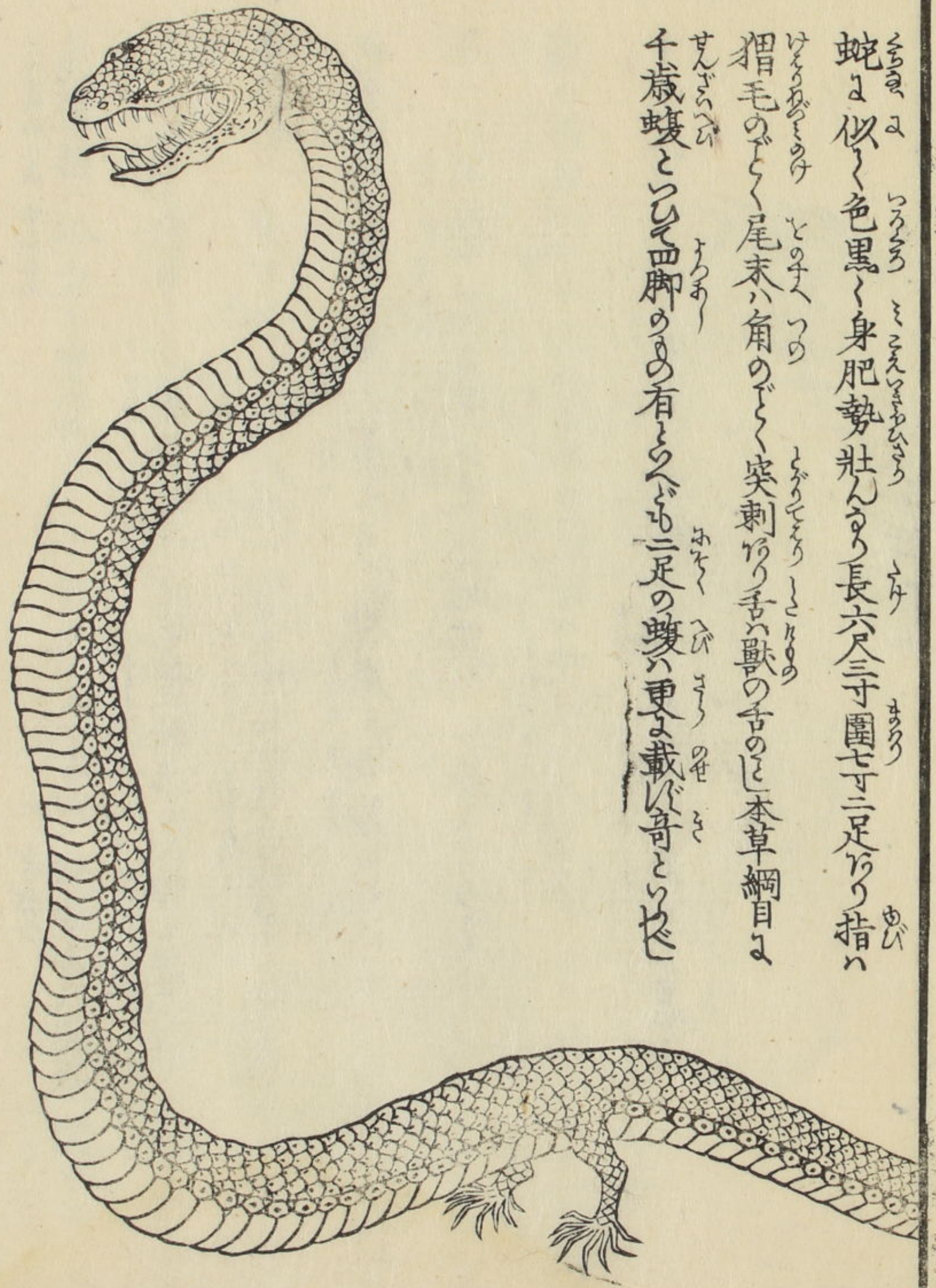
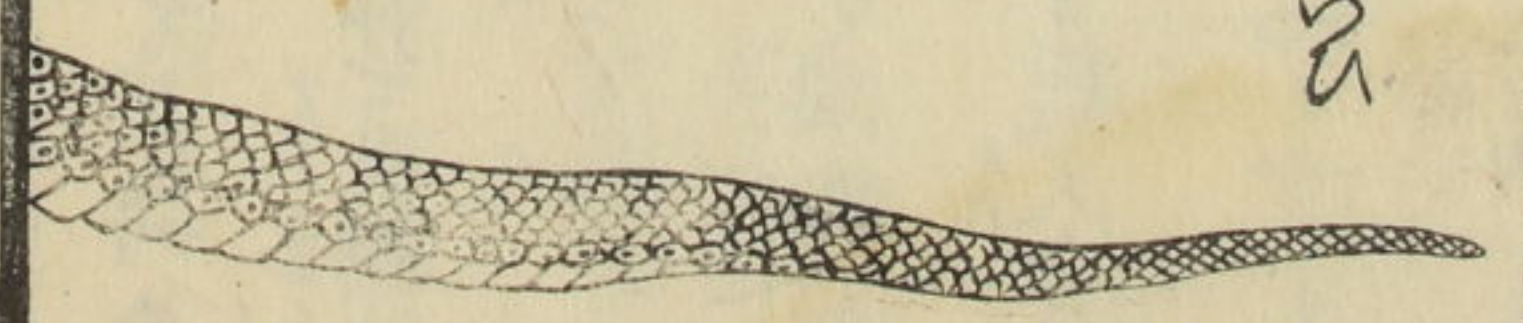
草の中の第一のれは萱とまく鳥の中第一のれは鶺鴒とまく

獸の中の第一のれは狼とまくとて思ひ合とて鍊の第一の

用りて貴とれののちねはことまがねと称とひあくもつと上つ

代より種々のやひも出しと知べい

○宝曆五年夏の夏紀州在田郡湯淺又於奇き蛇と捕ふ其形凡



蛇は似く色黒く身肥勢壯なり長六尺三寸圍七足り指ひ

猬毛のとく尾末の角のとく突刺り舌の獸の舌の巨本草綱目に

千歳虺として四脚のの有とるも二足の虺は更に載ひ奇とり也

○豪猪

俗云也未阿長之

山猪蒿猪獠猪鸞猪

ホの名りり安永元年阿蘭陀より

薩摩國へ傳來し翌二年己の春浪華よ来りて觀物と云其形猪の如く頭

兎に似く色白し身毛長く平く髪搔のぞく恰も管と以て作し簾と着

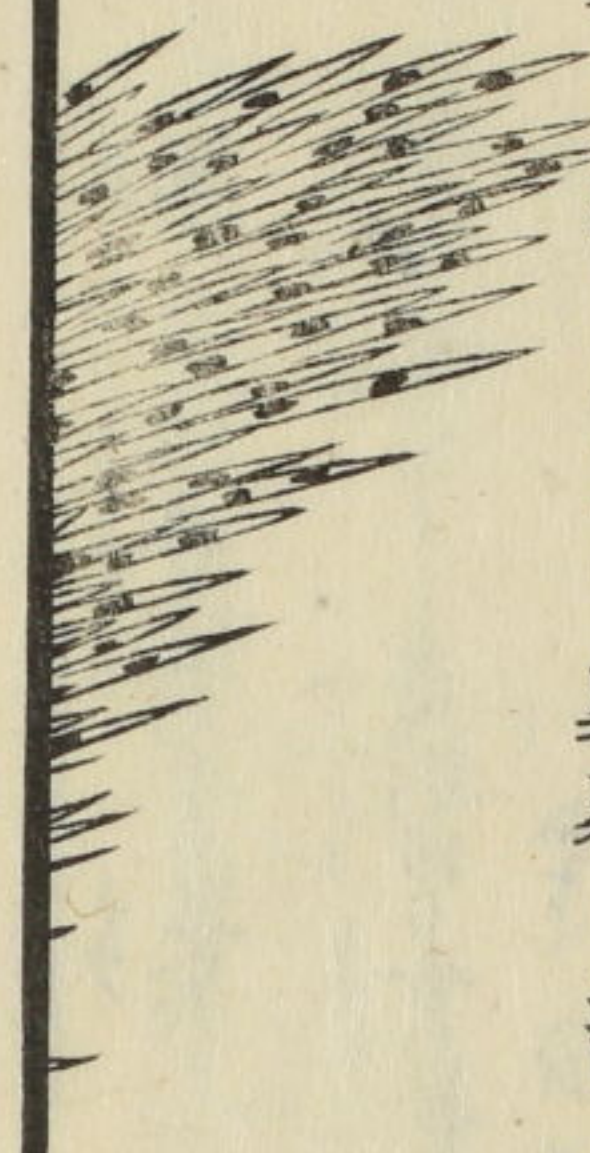
る如く身と奮ひ動る時ハ鳴音金具と打合はぐ毛の色白く中ハ所々茶

色の斑りり實は奇異の獸なりと説く唐土南陽の深山に生ずる「サニト」は是

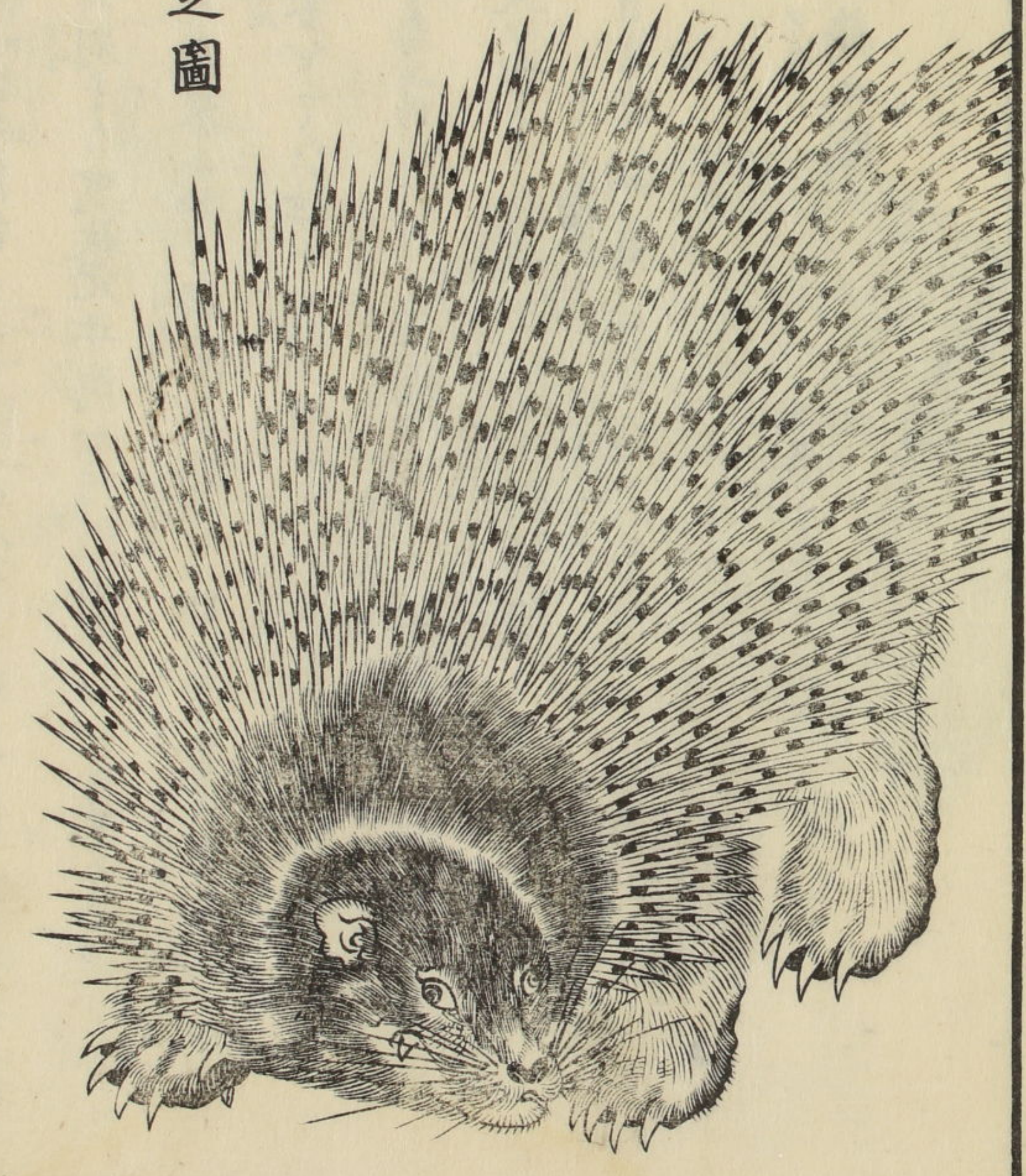
なり又靈獸目鑑は見へる身毛其年の氣より愛は唐人其色と見て

歳の運氣と考ふるハ當時の豪猪ハ咬啣吧國の産なりと蘭人捕獲し持渡

しとハ本草綱目より豪猪の説とい大同小異りり畧之



豪猪之圖



○食火鷄一名駝蹄鷄蘭語カスワ又俗又俗駝鳥然れども食火鷄

と駝鳥ハ別寛政元年酉七月阿蘭陀船のせ長崎又来同二年

戊五月より浪華不松觀物此食火鷄ハ西南天竺より出奇鳥あり

常ハ米麥とひ悖を時ハ缺石瓦火炭と喰ヒ其糞不出ハ

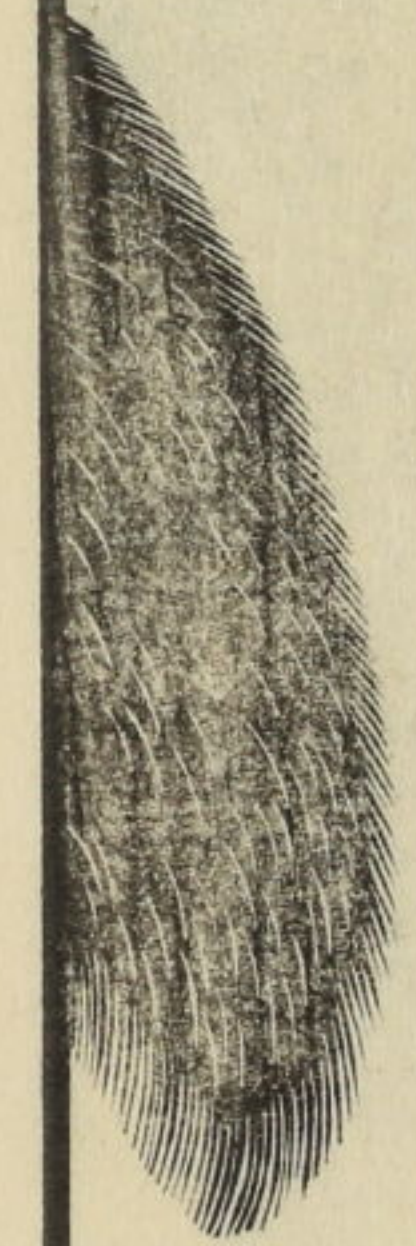
鳥あり鳥あり大便二穴あり鳴声地又ひ雷の如ク物毛逆立お

る支り後形状凡土佐野の身重拾八貫目あり

餌飼一日又握飯一升五合余食ハ

食火鷄之圖

毛黒シ長キ野凡ニ尺許



本草綱目載諸書云其說有不同焉身駝蹄蒼色舉頭高七八尺張翅丈餘食大麥或食鐵石火炭足指利爪能傷人腹致死日行七百里其飛不高卵大如獲此鳥出波斯國三佛齋安息等西南天竺
和漢三才圖會云按阿蘭陀人貢咬啣吧國火鷄彼人呼曰加豆和留肥州長埒或畜之形畧類雞而大高三四尺能食火燼及小石其糞乃炭或石也人近則趕而為啄

按古今萬國新話云食火鷄ハ番達ニ産ス其名ト「エメウ」ト云ク其鷄ノ如ク舌ヲ翼ニシテ羽毛黒ク頂上ニ冠アリ其質鼈殼ノ如シ爪ハ甚ヤリトク物ニ觸ルバ後ニ爪ヲ蹴キテ馬ノ跳ルニ似テ熾ク炭磁器ノ缺トシテも投テ之ヲ破ル則チ食ハ是「エメウ」ニあるものなり所謂食火鷄なり俗人やもそれバ

食火鷄と駝鳥と取違へく覚へるものなり云々然ると此ハ此又渡リハ食火鷄ハ

鷄ハ一ト駝鳥といハハ非ズ

○老人雜話云世上ニ金銀沢山ニあるト五十年以來あり 台徳院殿の御時

今ノ代ト甚相違ト南都東大寺ノ奉加ニ頼朝金五十兩ト寄進せんといれられども其年早キ都合トノハ云々東鑑ニ見ヘリ

按江村專齋具の説右の如クあれども甚ク僻言ナリ其證ハ

東鑑 建久五年三月廿二日被奉沙金於京都是東大寺大佛御光料也被下佛師院尊支度可被進二百兩有御教書云 五月十日被進砂金百三十兩於京都且可傳獻由被仰遣二條前中納言能保卿之許云是東大寺大佛御光料去春之比被進之殘也三百兩可入之由云 今日大仏供養也 同六年三月十日

將軍家令施入馬千疋於東大寺給義盛景時成尋昌寬等奉行之元
御奉加八木一萬石黄金千兩上絹一千匹云々

右の如く見へれば専齋翁何よりくる妄談と記されざるや雑話小崎合戦

秀吉上著以前の支まり由なれどもとて此書の説ハ信用なきが如く

又ある隨筆又武藏房辨慶ハ東鑿又載ざれば人の有無疑きよりとて正

彼書見へれば是亦み如東鑑版行以前の偽説と受けしるや

○小松内府が宋の育王山は黄金と贈られ支平家物語盛衰記亦記せざる

同書又病革の時宋國の医の治療と受ると我國の耻辱ありと近づけられ

さりとて支矛盾せり蓋是よりこれ宋高の方物と公へ奉り時沙金漆革

ホとのひくと兼安中の玉海又見へり然る時ハ當時此人大納言と奉行

○さうまうと以後人の附會せるやあらん津國法樂寺の佛舍利も彼

宋高より得のひも有べり

又云一侯家の所藏又育王山金渡の墨跡ありて昔より世に名高

其文と見又當時彼寺の佛照禪師の弟子と云へられ法語りて聊

施金の夏ち一人迷あづる自余此金渡の説は偽妄の支どもあり

老人雜話以下山川正宣の説あり

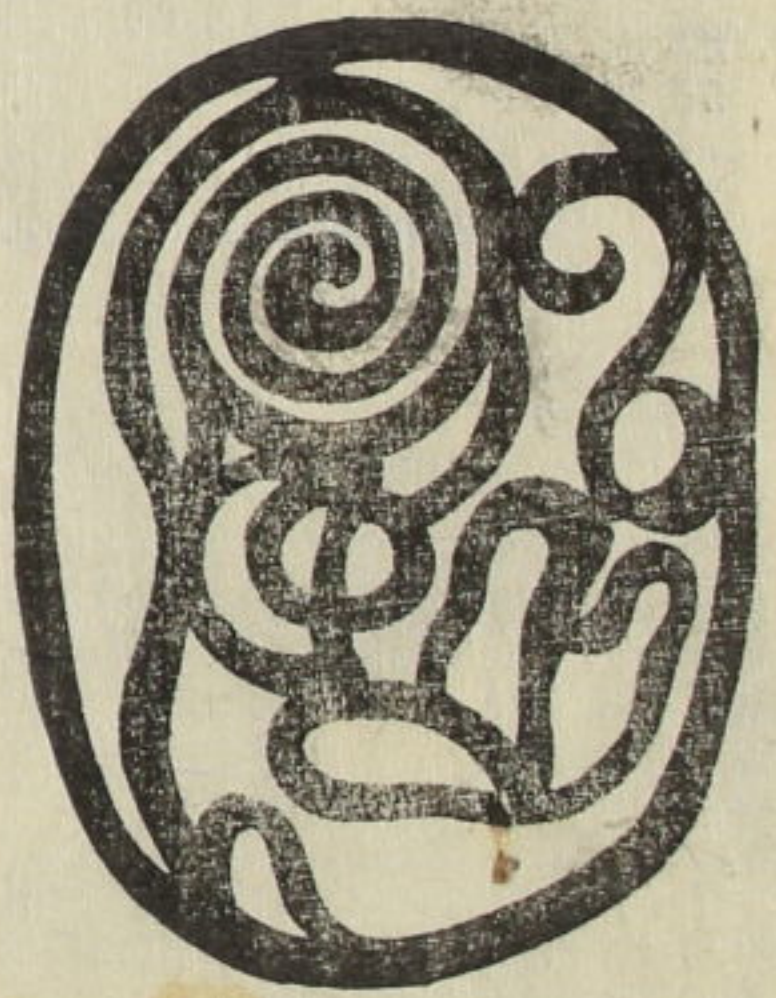
○高野山寂靜院又弘法大師の真蹟あり實又紛るは所ありて赫とて者

あり故又摸写しとて不出と

藏

靜

花押



○寶曆十三年癸未四月望日京師東山芙蓉樓ふおい産物の會を催とこと
あり會主の鑑古堂不磷齋より其品目左の如し

銀蛇 鏡魚 漢渡大蘆簾 變生松花二品 海松毬 李章治
レイシキ螺 龍宮螢介 鴨脚螺 紀州田辺 岡田伊左衛門

○介品十五種 龍宮冠介 大石蛤 菊文石 尾州代赭石 美濃代赭石

近江代赭石 拘骨木化石 全蝸二箇 海カモジ 異品龍膽 一種清政人參

○柳品十種 官柳 垂柳二種 鬼柳 長壽仙人柳 漢渡蒲柳

和蒲柳 移柳二種 青楊 白柳 鑑古堂

○竹品十二種 淡竹雌雄二種 苦竹 冬竹 紫竹 佛眼竹二品 筍竹

朝鮮製箭筈幹竹 スミ竹 鳳尾竹 方竹 松前産淚竹 朝鮮假湘妃竹

黄金嵌碧玉竹大小二種 茨竹 稷竹大小二種 天親竹筍 秋蘆竹 邊白竹

千里竹大小二種 弱大小二種 疎節竹 慈竹 無葉竹 挑枝竹 業平竹

實心竹 勝山 竹蔗 伊豫篠 漢渡弱葉 漢渡太蘆 二力竹 雄竹 竹竹紉

○雷刀七種 鎌 鋸 鉞 斧 鑽 燧 菜刀 石鑿品 出羽 陸奥 出雲 越後 土佐 美濃 能登

雷墨 出羽元相介 豊後柴石 水精顆 楓 大葉楓 波枕 鱗枕 千年白色

珊瑚サシゴデノツミハチ樣海絲氏 海槌 白海檜葉 紅石帆 黃柵糊 不磷齋

魚品七種 虎斑鮫皮 蜀江螺 碗黃假山博古圖 高又乙爵同 漢皂壺

古鏡四 宋鏡一 博古圖海馬蒲萄鑿 同漢長宜孫子鑑

同漢尚方鑿 唐八花鑿 唐小八花鑑 泗濱雲磬 大車渠

黑石英假山 松梢石

○ 薔薇品十五瓶 紅薔薇ボクシイバラ 黃薔薇 重瓣七姊妹ホサウイダ 大葉單瓣七姊妹カイトウイバラ

清渡千葉玫瑰花ハミナス 淺紅千葉玫瑰花 白玫瑰花 粉紅金罌子花オニハイバラ

白金罌子花トオシイバラ 白茶藤花 白野薔薇花 粉紅野客イバラ 紅月季花オウウシユン

粉紅月經花オウウシユン 鬪雪紅サレシヤクイバラ 村上謙益

○ 白微ノナハラ品八種 紫花白微アツボウサウ 白花白微 黃花白微 蔓生白花白微

カモメツル 蔓生紫花白微イヨカグラ 蔓生大葉白微ソルカシハ 竹葉白微 豐鳴宗義

猪膽 猪肺 猪肝 武藤道竹

タカ一ツノ牙 鯨魚牙 鈴松毬 吉永春治

播州舞子濱産海へり 橋本重左衛門

アニツバメ 末吉八郎左衛門

象皮二片 烏賊魚隱足 鷄冠雄黃 虎頭骨 玳瑁和州南都 古梅 園

海牛四品 品字梅ヤツメクサ 同 藤田七兵衛

カセブカ 讚品産蝦ノシ 長尾隱鼠 水虫二種 同 安倉茂左衛門

天梅オシヤヒシヤク 狂言バカメ 紅毛黑石脂セキヒツ 春日山産青石脂 和赤石脂

金峯山産赤石脂

同 和角養軒

牛扁二種 章魚石 春日山産禹餘糧二品

同 井上平五郎

薑石 カワタケ石 土佐石蛤 漢種白蘘

同 内田七左衛門

松品二十種 黒松 朱松 矮松 海松 金錢松 五粒小松 五粒白松

江戸白髪松 五鬢鼠松 柴松 長鬢鼠松 鴛鴦松 水松 社松 金松

羅漢松 鳳尾松 檉松 松上寄生 松上藤 千年松

鬼解蟹 勢州津 山村順茶

折介 和土茯苓 同 松坂 丹波玄孝

苜蓿虫二種 ハラキレ クジラカキ 紅絞九輪艸 同 同州 桐上友仙

魚虎 タユノフシ 勅魚 月ノ糞 一種トクヒ 同 同津 濱田春菴

松脂化石 玉蘭

和州南都 藤村佐兵衛

穿山甲 へイサバサラ 蚶珠 鄭荅 天人花 朝鮮星才 植木屋助五郎

朝鮮姬杉 絞琉球 同 祐十郎

通計二百四十余种

○寛永の初の頃尾州熱田白鳥の任持慶香和尚濱松普濟寺の任職不當又
 院せられ一兩日過ぐ町の徒薄黒色の犬と一疋連来り寺に飼ふと勸む
 和尚見く毛色いと珍しき犬なりと留置り飼ひしが年限とて退院
 せしる時彼犬も又用をりて本つれ来り男の方へ飯され其夜和尚の
 夢又彼犬来りて我の足下の親をり連り行飼へしと和尚夢をり翌朝
 僧衆に向ひ叔く犬と言ひも油断のあぬ者く我親をり程又連り行よと

告るるつと笑ひて語られり又次の夜の夢も同く犬まつて我実又其方の
 親も若連て行われり御身の命と取べりといふ時又和尚夢さめく大
 驚き今疑ひて暗く彼犬と呼さる連て熱田へ入れり白鳥あつても
 此大地を踏ど座敷のく居る飯と喰ふも和尚と相伴小く夜に和尚の聞小
 臥そ寛永十年の頃江湖と置れり彼犬和尚と同く一番の座の飯臺は付ゆ
 大衆見く数々嘆き何の譯りて斯畜生と一所又飯臺は付とゆらん哉
 是と止ゆんぞん江湖と分散せんといふ和尚きて大衆又對ていひ其憤
 所理あり去ちて此犬に我親あり其故に如何々を省く久し能言され
 一六六大衆も漸兼引く堪忍せり彼大江湖の次の年死す其時龕幡天盖と拵
 念頃又送り三日の中懺法を修り吊りられり本秀和尚のたると知り語られ

江湖會とりて彼宗又あつて假初あつてぬとあり
 大勢の禪僧其寺又集り永く滯留し勤也

○江戸糺町常泉寺へ他所より犬まつて子と三定うむ然る中にて一疋の子と母犬の數
 く悪く乳を飲まるとを疎く故又其犬の瘦く見苦く或時任持
 の夢は母犬まつて告く曰我へ前生遊女の身ありが後又男と持て二人の
 子と産り然る又先妻の産り継子一人有しが因縁のありて我身と初め
 二人の實子も一人の継子もあつて病死せしが思ひもや此犬と生と二人の子
 も又但犬とまつて我子とあまり叔亦其継子の父に存らへり今尚世にあり
 必と来りて此犬を乞求じべり速く与へると言ひ夢覺る翌朝夢み告り如
 外より男一人来りて寺中を見ゆり此犬の子を見出し一疋所望りたるより
 任持いと安き支をりて心よく兼引られ男はよりこびり彼乳を飲せり

瘦犬を所望とて連るる時又寛永十五年の夏と聞ゆ

○延寶年間浪花おつて生あぐりやうと西手の

のきり者りり足と以て用と辨れ且字と書
方と射る芝居ふ出観物とせよは聞ゆ是の
寺嶋良安の正しく見らるよ

和漢三才圖會に見ゆ
是と證ととどし俗ふ在兒

と云西陽雜組云大曆中

東都天津橋有乞兒無兩手以右足交筆寫經云

錢欲書時先再三擲筆高尺餘味曾失落書

跡官措手書不如也

故人公左画



○「フランス」に不落子と書べらる清異録云不落酒器也樂天送春詩銀花

不落從君勸馮王家有水晶不落一隻あれば不落酒器より強し硝子の酒器の限るすく覚ゆ

○指物又作る島桐といふ隱岐島あどり出る一種の桐る故又島桐と号く
キリの訓ハ水理をりホ工目と賞翫して付くる訓あり

